恋の結末。

遊樹野原凛之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋の結末。

【Ｎコード】
Ｎ９１３６Ｙ

【作者名】
遊樹野原凛之

【あらすじ】
７年間一緒だった夕架と稜哉。
稜哉に恋心なんて抱くはず無いと思っていた夕架は、ある日自分の気持ちに気づいて・・・？
グダグダラブコメディ！

☆登場人物☆（前書き）

幼馴染どうしの、ラブコメディ・・・？な、グダグダな作品です！
主人公も、親友も、全員変人です。

☆登場人物☆

登場人物

○前川（まえかわ）　夕架（ゆうか）
主人公。青い四角眼鏡に、黒髪のセミロング。
一見、真面目そうだが、実はめんどくさがりの変人第一号。
オタク。稜哉の事が好き。

○小川（おがわ）　稜哉（りょうや）
夕架の幼馴染。野球部で、丸坊主。顔はいい方。
でも性格ゆえに、モテない。

○佐藤（さとう）　京（きょう）
夕架の親友。絵を描くのが大好きで、将来の夢は漫画家。
髪の毛はショートでボサボサ。常識人（？）で、ツッコミ要員。でも時々ボケ。
オタクで、変人第二号。

○中里（なかざと）　美穂（みほ）
夕架の親友。天然で、可愛らしい子。
黒髪の、肩までのばしたセミロング。
ボケ担当、たまにツッコミ。変人第三号。

○島田（しまだ）　雅（みやび）
夕架の親友。お金大好きで、なんかありえない位変な子。
セミロングで、ボケ要員。
変人第四号。

○池原（いけはら）　美沙（みさ）

夕架の親友。ほぼ雅のせいで、変人第五号になっちゃった子。
ガリガリで、夕架にいつもおちょくられて、そのたびに追いかけてる。
ボケ担当。でも夕架にはツッコミ。

☆登場人物☆（後書き）

メインは、だいたいこの６人です。
「初投稿でオリジナル！？」というツッコミは無しでお願いします。
ちなみに、サブキャラもいます！というより、サブキャラが大半です！
まあ、グダグダですが、宜しくお願い致します！

★プロローグ★

時々、アイツの事を考える。

「おーい、生きてる？」
京のその声で、目が覚めた。
「生きてるわいっ！」
すかさず、僕は返事をする。
「ちっ、生きてたのかよ・・・。」
「チョイ待て！残念そうにすんな！」
そう発言したのは、雅だ。
ちょっとゾッとした。
理由は・・・
「食いたかった・・・」
「人食うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
人肉を食いたがるから。

もちろん、冗談だ。でも雅が言うとマジっぽくて凄い怖い。
「で、何考えてたの？」
美沙が聞く。
「もやしの精霊に言う義務はな・・・ふがっ！」
「あはははぁ？今なんて言ったぁ、夕架くぅん？」
美沙は凄いガリガリだ。なのであだ名は「もやし」ｏｎ「骸骨」ってなってる。
しかし、本人は凄い嫌がっているため、それを言うと・・・
「あっがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
・・・ご想像にお任せします。

変人ライフ。
これが、僕らの日常。
たぶん、雅が一番変わってる。いや、絶対。
僕らは周りの女の子みたいに、オシャレとか、そういうのは（美穂以外）興味ない。
ましてや、恋話なんか、ありえない。
京なんか、自分のこと「俺」って言ってるし。・・・僕もだけど。
だから、恋愛なんて、僕ら（美穂以外）には程遠いと思ってた。
でも、最近・・・

「また、稜哉の事考えてたー？」
「・・・ッ！黙れ！」
僕は、恋をした。
「またまたぁー。」
京と美沙がニヤニヤ笑った。

「黙れ！何であのバカの事を俺が考えなきゃならん！」
「とかいって、そのバカを好きなのは何処の誰ですかぁー」
僕です。
でも、皆の前で認めるのは恥ずかしい。
だれだって、そうでしょ？
だから・・・
「とりゃあああああああああああああああああ！」
逃げよう。
「え！？（京）」
「普通逃げる！？（雅）」
「待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！（美沙）」
「夕架ー！（美穂）」
皆の声が遠く聞こえ・・・
「どりゃあああああああああああああああ！」
近く聞こえた。
後ろを見ると、美沙が猛スピードで追いかけてきていた。
「待てえええええええええええええええ！」
「いぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！」
・・・その後僕がどうなったかは、ご自由にお考え下さい。

言うのを忘れてた。
僕は・・・
馬鹿で、ナルシで、はげで、
顔（？）と運動神経だけはいい、
幼馴染が、

好きです。

『認めたぁー（＾皿＾）』

『き、聞くなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

★プロローグ★（後書き）

グダグダでスイマセン・・・
呼んでくれた方、神です。そして、有り難う御座います。

ちなみに、主人公は自分のことを、心の中では「僕」、喋る時は「俺」って言います。
あと、「あがぁ」というのは、沖縄で「痛ぁ」っていう感じです。
分からなかった方、すいません。（作者が沖縄人なので。）

方向性が全く決まってません！
でも、読んでくれると光栄です！
宜しくお願いします。

1．好きな理由

小川稜哉。
僕の、好きな人。
性格は――――――――――――

最悪。凄い位最悪。逆に尊敬する。

出しゃばり、ナルシスト、五月蝿い、馬鹿、ウザイし、好きな人がすぐコロコロ変わる・・・
他にもいろいろ。でもあげたらきりが無いから、この位にしておくね。
でも好き。理由？それは・・・
根は優しいから。

『え？』
京達が声を揃えて言った。
「・・・たった、それだけ？」
美穂が聞いてきた。
「うん、そうだけど？」
え？だめだった？
・・・いや、正当な理由だよね。
「軽いなぁー」
雅が呆れた様に言った。
「優しいからって・・・」
『ねぇー。』

全員が雅に賛同した。
どこのオバサンだ、お前ら・・・って、その前に！
「おい！軽いってどういうことだ！
あのな！7年一緒にいたら分かるけど、あいつすっげぇいい奴なんだぞ！？
そりゃ、ウザイけど、でも正義感と責任感強くて、優しいんだぞ、あいつは！
・・・って・・・」
うにゃあああああああああああああああああああ！！！！
なんか僕、凄い恥ずかしいことしてない！？
こいつ等の前で稜哉庇うとか、自殺行為だよ！！
急いで口をつぐんで、京達を見たら・・・
『ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤｎ（ｒｙ』
・・・遅かった。
「い、今のは忘れろ！無かったことにしてくれ！／／／」
「あら～？夕架ちゃん、顔が赤いわよ～？」
雅が茶化した。
自覚してるよ！！
さっきから、顔に熱が集まりっぱなしだ。
「あ～、じれったいねぇ～（京）」
「大好きなんでしょぉ～？（雅）」
「認めなよ～（美沙）」
「若いっていいわねぇ～（美穂）」
ん？なんかお婆ちゃん混入してないか？
・・・気にした方が負けだ！
というか、それよりも！
「いつ、どこで、誰が『大好き』って言ったあああああああああああああああああああ！！！！」
そりゃ大好きですけど！そうですけど！

言う必要無くね！？
つか、感づくな！
恥ずかしいだろ！？
「えー、さっき、（京）」
「ここで、（美沙）」
「夕架が、（美穂）」
「言いました☆（雅）」
「おいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！
勝手に言ったことにするなあああああああああああああああああああああああああああ！！！」
・・・喉が痛い。
でも、言ってないのに分かったとか、この人たちエスパー！？
「ああ、ごめん。間違えた。」
雅が言った。
「夕架の心を皆でよんだんだ☆」
・・・エスパーでした。
「ってことで、言え☆」
京が言った。
なんか、嫌な予感がする。
「何を？」
「『大好き』って。」
・・・＼（＾ｐ＾）／
「なんでだよ！！」
「さあ。」
美沙が肩をすくめた。
「面白いからじゃん？」
「ざけんなああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」
僕は叫んだ。

すると、雅がそれを見て言った。
「言わんと殺すよ？」
雅、笑顔だけどオーラが黒いよ・・・・
「・・・ったぁよ！」
言うしか、無いか・・・
「俺は、小川稜哉の事が・・・

大好きです・・・っ／／／／」
ああ、さらば愛しの大地よ・・・（（キラキラ

『夕架死んだぁ！！！！！！』

『起きろおおおおおおおおお！！！！！！』

1．好きな理由（後書き）

というわけで、照れ屋な夕架さんの話でした！
なんか、京さんツッコミじゃない・・・
しかも、重要な稜哉さんもまだ出せてない・・・
・・・グダグダですが、次は頑張りたいと思います！

2．気付いた日（前書き）

初、学校が舞台の話です。
（今までずっと京の家でした。）
ちなみに、京・雅・美沙・稜哉は、隣のクラスです。

あと、これは前回の前の日の話です。

2．気付いた日

これは、僕が稜哉への気持ちに気付いた時の話だ。

キーン、コーン、カーン、コーン。
一時限目が始まることを知らせる鐘が鳴った。
「正座！」
隣のクラスで、号令がかかったらしい。
『はい。』
「はい！！」
皆の声が揃う中で、一つだけ、一際でかい声が聞こえた。
うるせぇ～！
絶対、稜哉だ。
あんな声聞こえたら、やる気失せるよ・・・。

「正座！」
お、こっちでも号令がかかった。
「はい。」
そう返事しようとしたら、なぜかさっきの稜哉の声を思い出した。
そして・・・
『はい。』
「はい！！」
・・・ありゃ？
なんで僕、稜哉級のでかい声、出したんだろ？

・・・さっきの事が妙に気になる。
ここは、乙女の登場だ☆
「美穂ー。」
「何ぃ～？」
美穂が、こっちを見ずに応えた。
美穂は僕たちの中では・・・っていうより、クラス1乙女だ。
美穂なら、きっと分かる☆
「あのさー、さっき隣のクラスの号令が聞こえた時、稜哉の声が聞こえて、凄いやる気失ったんだけど、」
「うん」

僕の言葉を聞いた瞬間、美穂が振り返った。
・・・美穂、すごく目が輝いてるよ・・・
なんか察知でもしたんだろうか・・・
「でも、その後の俺らのクラスの号令の時、返事しようとしたら、
なぜか稜哉の声思い出して、すげぇ大声で返事しちゃったんだけど・
・・」
「・・・それが？」
・・・残念そうに聞き返さないでぇ～！
僕には凄い重要な事なんだよぉ～！
「うん、なんか気になってさ。
まるで・・・」
「？『まるで・・・』何？」
「稜哉の声で、元気もらったみたいな・・・」
そう、まさにそんな感じだ。
美穂はそれを聞くと、目を輝かせて、
「本当に！？」
と言ってきた。
・・・なんて感情の浮き沈みが激しいんだ、この人は。
でも、それよりも、美穂の反応が気になる。
「・・・なんか、心当たりあんの？」
「うん！！」
美穂が嬉しそうに言った。
「それ、きっと、恋だよ！！」
「ん？」
ん？は？え？
はあああ！？
この人、今凄い爆弾発言しなかったか！？
・・・きっと聞き間違いだ！うん！
コインとか苔とか賭けとか柿とかを僕がここここここ恋っていう美

味しそうなモノに聞き違えただけ・・・・
「だから、恋だってば！」
・・・・。
「ナニソレ、タベモノデスカ。」
「違うよ！」
・・・聞き違いじゃありませんでした。

2．気付いた日（後書き）

・・・中途半端な所で終わっちゃいましたね・・・。
一応、これから主人公が気付いていくと思います。

3、気付いた日　2

「って、はあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！？」
ありえない、ありえない！！
僕が、稜哉を好きだなんて・・・
「ありえない！」
そう叫んだ。
「じゃあ、たとえば稜哉が他の女の子と仲良くしてるの見て、どう思う？」
美穂が満面の笑みで聞いてきた。
・・・それは・・・
「俺とも喋ってくれって、思う・・・。」
って・・・
思いっきり、嫉妬やああああああああああああああああああああああああああああああん！！
「じゃあ、稜哉が夕架の事無視したら？」
「見てほしい、って思う・・・」
嫌ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！

「・・・でしょ～？」
美穂がドヤ顔で聞いてきた。
あの後僕は、美穂に質問攻めにされ、出た結果が・・・
「俺、思いっきり好きやん、稜哉の事・・・」
ということだった。
今考えてみれば、全部「好き」という気持ちの表れだ。
しかも、この嫉妬（？）やモヤモヤした気持ちは、小学校４年から続いている。
僕は今、小学校６年だ。
と、いうことは。
「２年間、好きやんけ・・・」
我ながら思うが、長い！！
スッゴク長い！！
恋愛小説みたいだよね・・・
「うん、嫌だ！」
「何で好きなのに拒否するの！？」
美穂が驚いたように言った。
「それは、嫌だからだよ、美穂！」

「理由になってない！！」
・・・怒られちゃいました☆

まあ、これが、稜哉への気持ちに気付いた日。
・・・気付かなかった自分、馬鹿だよね。

『馬鹿だ〜』
『黙れ！！』
『自分で言ったんだろうが！』

3、気付いた日　2（後書き）

ごめんなさい、短いです・・・。

グダグダですが、感想などがありましたら、宜しくお願い致します。

４．脳外科へＧＯ！（前書き）

これは、１話の後・・・だから、２・３話のだいぶ後の話です。

４．脳外科へＧＯ！

「・・・ということで、合唱出たい人ー！！」
今は、一時間目。音楽の時間だ。
僕が一番好きな教科なんだよね～。
合唱というのは、毎年僕らの小学校の高学年が出てる、合唱コンクールの地区予選だ。
今年は６年だけで、希望者が出るらしい。
僕は出るのかって？それは・・・
「はーい！出ます！」
・・・出るＹＯ☆
まあ、僕は出しゃばりだからね！！
あー、でも美穂は出ないだろーなー。
そう思って美穂の方を見ると。
「ん？」
は？え？

おお！？

そこでは・・・美穂が、満面の笑みで手を挙げていた。

・・・美穂、頭でも打ったのか。

「美穂！！なんで希望したの！？」

音楽が終わると、僕は美穂の席にすっ飛んでいった。
「ええ～、だって・・・」
美穂が口ごもった。
「なに？」
「夕架も出るし、稜哉もいそうだから・・・」
あ～そうだね～、いそうだよね～・・・って・・・
「ちょっと待てええええええええええええええええええええええええええええええええええええ！！」
こいつ、まさか・・・！
「俺らを監視でもしようというのか！！」
そうなのか！？
「うん！！！」
そうでした。（ＴдＴ）
「・・・美穂。」
「うん、何？」
・・・こんな美穂に、これだけは言っておかねば。
「良い先生紹介するから、脳外科行って来い。」
「頭いかれたわけじゃないから！！」
・・・嘘だろ。
すげぇ不安なんだけど。
「まあ、細かいことは気にしないで、京達のところ行こう！」
そう言って、美穂は京達のクラスに走っていった。
・・・監視を「細かいこと」って言えるって、アイツやっぱり脳外科行った方が良いよ。
でも一応僕は、美穂の後を追って走って行った。

「・・・京！雅！美沙！」
京・雅・美沙は、２組だ。だから、２組のクラスに居るはずだ。
なので、２組の入り口に立って京達を呼んだ。
だけど・・・
「ありゃ？」
いない。
ありゃ？
その時だった。
「・・・美穂、おぬしも悪よのう。」
後ろから、時代劇の悪役・・・じゃなくて、雅の声がした！
振り向くと・・・
「ニヤｎ（ｒｙ」

変態と言う名の雅がいた！
「・・・誰が、変態じゃあああああああああああああああああああああああああああああああ！！」
「ごめんなさあああああああああああああああああああああああああああああああああああい！！」
・・・口に出ていたようです。

「だって、雅マジで時代劇に出てくる変態悪人に似てたんだもん！！」
雅のプロレ「黙れ。」・・・お説教が終わった後、僕はそう叫んだ。

「んな役、無いから！」
京が言った。
「あるよ！」
「何処に。」
何処にって、当たり前・・・
「水戸○門に。」
「ねぇよ！！勝手に水戸○門汚すなあああああああああああああああああああああああ！！」
「あがああ！！」
・・・京にプレーンバスターされました。
「・・・何やってんの、お前等・・・」
いきなり、上から声が聞こえた。
救世主登場か！？
「って・・・」
えええ！？
「りょ、稜哉・・・」
・・・そこにいたのは、紛れも無い稜哉だったのだ。

４．脳外科へＧＯ！（後書き）

続く！的なｗｗ

・・・すいません、ただめんどくさかっただけです。

本当にスイマセン！

ちなみに、夕架達は１組、京達は２組です。

グダグダですが、感想やダメだしがあったら宜しくお願いします。

つか、空白多い・・・（（涙

5．脳外科へGO！2

「なななななななななななななんでお前、此処に・・・」
僕は絶句した。
いや、そりゃ幼馴染だからこんなこと普通・・・じゃないけど！！
でも、稜哉に僕の変なところを見られたことはいっぱいある！！
・・・けど今は、稜哉のこと意識しちゃってる訳だし！？
まあ、簡潔に言えば、恥ずかしい。
誰だって、そうでしょ！？
だから・・・
「とりゃああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」
逃げよう☆
「は！？（稜哉）」
『・・・今なら逃げた理由、分かるよ・・・（京・美穂・雅・美沙）』
「何で！？（稜哉）」
皆の声が、遠く聞こえた。

・・・ん?前にこんな事あったような気が・・・
・・・ま、気にしないでおこう☆

僕はあの後、秒速１５０ｋｍで靴に履き替えて運動場に出た。
「夕架〜」
運動場の隅っこにある遊具に座っていると、後ろから誰かの声がした。
見ると・・・
「おりゃああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」
バキシュッ☆
歯切れのいい音が一発☆・・・じゃなくて！！
「うひゃああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」
美沙なんで飛び蹴りするのおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！？
「・・・ふぅ。」
美沙が満足そうに言った。
「『ふぅ。』じゃないでしょ！？」
すげぇ右頬が痛い！！
「なんで殴ったん！？」
「ん〜、なんとなく？」
美沙が肩をすくめて言った。
「ざけんなああ！！！！！」
僕は叫んだ。
すると・・・
「そういえば夕架〜。」
こんな状況のなかで、美穂が能天気に喋りかけてきた。

空気読め、この天然！！
「・・・何？」
なんか、嫌な予感しかしないよ？
・・・すると、僕以外の四人は声を合わせて言った。
『俺ら（私達）、これからお前の事監視するから☆』
「お前等全員まとめて脳外科行けえええええええええええええええええええええええええええええ！！！！！」
運動場に、僕の悲痛な（？）叫び声が響いた。

稜哉『結局、逃げたのなんだったんだ？』
夕架『な、なんでもない！』
京『・・・いつか分かるよ、稜哉。』

5．脳外科へＧＯ！２（後書き）

グダグダでスイマセン！！
凄い意味不明になっちゃいました（（汗＆涙

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9136y/

恋の結末。

2011年12月1日21時45分発行